

St. Luke's International University Repository

「総合実習:看護提供システム」の3年間の経緯

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): nursing delivery system, nursing practice team, organization autonomy 作成者: 豊増, 佳子, 岩井, 郁子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/403

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「総合実習：看護提供システム」の3年間の経緯

豊増 佳子¹⁾ 岩井 郁子²⁾

要 旨

学生自らが、実習目的に沿った実習内容を決定し、その実習を主体的にマネジメントして、学生によって構成する看護組織を運営しながら看護を実践するという実習を計画・実施して3年が経過した。この3年間における各年度の学生、そして、病棟スタッフや教員のサポートグループのダイナミクスや体験は異なっていたが、学生は「実習に出ないと損だ」「実習に責任を感じる」「自分たちの病棟だ」「チームで看護を提供することを実感」「ナースになることが待ち遠しい」など、それまでの実習とは異なる体験や学びを得ることができていた。そのため、今後もこの実習方法を継続したい。

この実習では、特に病棟側の実習受け入れ体制は必要不可欠である。病棟スタッフと教員、学生が一体となって実習に取り組む時、この姿勢が学生の学習効果を高め、また学生の病棟スタッフおよび看護への大きなプラス評価につながり、看護への意欲と自信、つまり自己効力感を高めると考える。実習目的・目標を達成するためには、学生と病棟スタッフとの話し合いの中で、内容や方法の詳細を決定していくプロセスを重視した方法の継続が必要である。

キーワードズ

看護提供システム、総合実習、チーム、組織、自律性

I. はじめに

学生自らが実習目的に沿った実習内容を決定し、その実習を主体的にマネジメントして、学生によって構成する看護組織を運営しながら看護を実践するという実習を計画・実施して3年が経過した。

この実習が、学生や病棟スタッフにとってどのような意義をもつのか、今後の継続に向けて、この新しい試みの3年間の経緯を報告する。

II. 本学のカリキュラムの概要と本実習の位置づけ

大学の理念は、豊かな感性を備えた人間性の追求と、看護専門職者としての成長の2つを大きな目的¹⁾とし、そのめざす卒業生を送り出すための具体的な教授-学習

のプログラムをカリキュラムに組み込んでいる。その中で看護提供システムは、専門科目(69単位以上選択)の中の「看護の基本」に含まれる。看護提供システムIは1年次に必修で2単位、IIを4年次に選択で1単位取得する。

臨地実習に関しては、3年次後期から4年次にわたって、健康状態別および各成長発達段階の特徴等を考慮した看護実習が集中的に行われる。総合実習はその最終段階で、学生が興味を持つ分野を選択し、それまでの学習を深められるような実習を行うものである。1998年度の総合実習：看護提供システムは、看護提供システムIおよびIIを学習した学生7名、1999年度は8名、2000年度は3名が選択した。

III. 総合実習：看護提供システムの意図

学生は卒業後短期間で1人のスタッフとしての役割を達成することを期待され、24時間の流れの中で複数の患者を受け持ち、自分であるいは支援によって看護実践を

1) 聖路加看護大学 講師(看護管理学)

2) 聖路加看護大学 教授(看護管理学)

学生	13月	14火	15水	16木	17金	18土	19日	20月	21火	22水	23木	24金
A	d	d	d	遅	d		夜			遅	d	カンファレンス
B	d		D	d	遅	夜		d	D	遅		
C		D	遅	D		夜		遅	D	d		
D		d	d		夜		遅	D	d	夜		
E	D	遅		夜		d	D	d	夜			
F	遅		夜		d	D	d	夜		D		
G	夜			d	D	遅		d	遅	d		

Dとは、8:00～16:30のインチャージ業務を意味する

dとは、8:00～16:30のスタッフ業務を意味する

遅とは、日勤の遅出業務で10:00～18:00を意味する

夜とは、準夜勤+深夜勤のことで16:00～8:30までを意味する

図1 実習スケジュールの例（初年度）

意思決定して、チームでケアを行っている。このような中で、臨床の場で求められる看護実践能力と卒業時点での臨床能力との乖離は年々著しくなり、自己評価において新卒者は、「現実とのギャップ」に関する項目を多くあげている²⁾。

このようなことから、看護提供システムでは、4年生というそれまでの実習での学びを背景に、患者対学生の1対1の看護実習のみの体験にとどまらない、看護の対象を複数人数としたチームという組織で、さらに、協調性や自律性、主体性を育む実習を行うことを意図した。

IV. 総合実習：看護提供システムの実習目的と目標

総合実習の目的は、1. 対象と環境との相互作用を力動的に把握し、対象の最適状態を生み出すことができるよう、メンバーの一員として主体的に自らの役割と機能を発揮し、働きかける能力を養う。2. 看護実践を通して、看護の専門性について考え、自らの看護観を深めることである。本実習の目標は、その目的をふまえながら、1) 聖路加国際病院および看護部の理念を理解し、看護の目標達成を目指して、病棟メンバーの一員としてチームで看護を提供できる。2) チーム・組織における各自の役割を果たすことができる、という2点を目標とした。下位目標として、「受け持ち患者をトータルに把握し、最適健康状態を生み出すことができるよう患者の生活の質(QOL)の向上をめざし、患者に必要なケアを計画し、実践、評価する責任と権限を果たす」、「仲間・看護婦・教員/ティーチングアシスタント(以下TAと記す)・婦長・医師・その他必要な人々から支援を受け、患者に最適なケアを提供する」ことを明示した。

V. 初年度の経緯

1. 初年度の実習の計画・準備

1998年度においては、この実習は初めての試みであったため、実習目標達成および学生のレディネスに適した実習病棟の選択、交渉、決定を教員が行った。病棟選択の際、1. 新しい試みを受け入れ積極的に関わる。2) 学生が自律的に看護を実践できる(健康問題の特徴・治療の特徴・在院日数)病棟であることを重視した。

学生は、実習に関するガイダンスの後、実習目標および下位目標を達成するために、どのように実習を進めるか、具体的な実習計画案を策定した。そして、この学生間で策定した具体的な実習計画案の中で、実習上直面すると予測される課題や質問事項を明らかにした。その後、実習目標の共有と、これら決定事項や質問事項を伝え確認するために、病棟スタッフ6名と学生、教員を交えたミーティングを行った。このミーティングは、学生が司会をし、教員は見守る中でサポートした。実習のスケジュール表作りや受け持ち部屋決定についてはアドバイスを受けること、病棟で特徴的な疾患やケア方法等については新人看護婦用のマニュアルなどから情報を得ること、実習開始前から開始後も看護婦他からサポートを受けられるという確証を得た。

この準備期間、病棟スタッフおよび教員は、学生の自律性を尊重しながら、彼女たちの考えとその計画が実行可能なように、全面的にサポートすることに徹した。このようにして学生は、1) 実習目標達成のための具体的方法の企画・交渉・決定 2) 看護実践のための学習(病気、治療、看護など)を自主的に実施、準備した。このプロセスでは、学生間の人間関係やグループダイナミクスの調整を行い、組織づくりを行いながら集団凝集性を高め、病棟スタッフとは信頼関係を形成するなど、実習

を行う上での基本的で重要な活動を行った。

2. 初年度の実習内容

1 病棟35床中 8 床の特定の患者群を、学生が担当する小病棟として学生が受け持った。その 8 床に入院中の患者のケアを、24時間継続して学生チームで責任をもって行い、学生チームのインチャージや遅番を配置し、申し送りも責任をもって実行した。実習スケジュール・勤務表も、スタッフの指導を受けながら学生が作成した。実習期間は 2 週間で、1 人あたり実質実習時間 96 時間であった（1 人 1～2 回の 16 時間の 2 交代夜勤を含む）。夜間の更衣や仮眠場所は、病棟側が提供・準備した。

1) 倫理的配慮

学生が担当する小病棟に入院している、また入院する患者へは、実習の目的・方法・指導体制や責任者に関して、まず病棟の責任者から説明し同意を得た上で、教員からも説明し再度同意を得た。同意が得られない場合には、この小病棟の病室を変更する準備もしていたが、基本的に患者の同意が得られないことによる小病棟の病室の変更はなかった。

2) 指導体制および指導方法

病棟スタッフは、日勤帯では、1 人の看護婦が学生の受け持つ 8 床のケアの最終責任を引き受け、ケアのサポートを行った。夜勤帯では、夜勤の看護婦の 1 人が学生受け持ち病室を含めた患者の最終責任とサポートを行った。教員/TA は、各勤務帯で学生の看護をサポートし、共に看護を実施した。記録や課題は指定せず、看護を計画、実行し、その評価は病棟のチャートに記載した。チャートに記載しないような情報や連絡・注意事項などを記載する学生間の連絡ノートは、学生たちが自主的に作成した。

3) 実習評価

実習評価は、申し送りの場面や看護の実行場面および看護記録を評価場面として、共にケアを実施する中での形成評価およびそれに基づくフィードバックを行い、最終的に総括評価を行った。評価ポイントは次の 4 点である。

1. マネジメント能力：実習目標達成へのマネジメントプロセス（企画・交渉・実行・評価）と日々の受け持ち患者のケア遂行における時間管理も含めたマネジメント。

2. チームとしての集団凝集性・協調性、役割意識と役割遂行：各勤務帯の学生チームおよび看護婦との連携や調和。出来ることと援助をうけることの判断。

3. リーダーシップ能力（上手な自己主張を含む）：チーム数人の小組織としての目標達成への影響力と取り組みの実際。

4. 看護実践・ケア能力（自律性、創意工夫）：1) 患者の把握、2) 患者の目標設定（短期－各勤務帯、長期－退院）、3) 生活の質：生活状態の把握、日々の基本的な生活行動への支援、4) 患者に必要なケア・治療・処置とその実践：ケア計画に基づいた実践、日々のケア計画表の見直し、検査・治療・処置の実行などから評価した。

3. 初めての取り組みの初年度評価

1) 学生の評価

本学では、カリキュラム評価をするために、アンケートを作成し 5 段階スケールの客観的評価を行っている。その本学カリキュラム評価委員会作成のアンケートおよび実習後の病棟スタッフとのカンファレンスで、次の結果が得られた。

実習に対する満足度は全体的に高く、来年もぜひやってほしいと答えていた。実習に出ないと損だと思え、もっとも健康的な実習で、日々の実習に燃焼できたとの率直な意見は、看護婦および教員の満足度を高めた。

実習期間や時間の妥当性についての評価は個人差があった。実習場所の受け入れ体制と看護婦や医師からの指導については、全員がよかったと答えていた。

学生数については、適当で、多くても少なくともチームが作れないと思うという意見も聞かれ、チームづくりの意識も芽生えたと評価できる。また、自由意見として、「患者ケアへの責任意識の自覚」「病棟組織への帰属意識」「看護婦の業務・職業の現実的認識」「看護婦としての役割遂行への誇り」など肯定的な意見が多く、これらの意見は教員の満足度も高めた。

また実習記録に関しては、実習記録がなかったのがよかった、患者と直接関わる中で、患者にとって何が必要で、何が問題かが時間の流れの中で見えてきたし、考えられ、疑問や問題意識を持つようになり、実習ノートのための問題探しをする必要がなかったと答えていた。さらに、個を中心とした既習の実習の意義とその価値にも気づき、過去の実習にも感謝し、学んだ内容を統合して実習できた、と評価していた。看護提供システムのカリキュラムは、看護提供システムⅡの履修を高く評価し、継続的に焦点を当てた教授－学習目標および方法と学習のプロセスそのものが学生間のチーム形成にも意義があったと指摘していた。

2) 看護婦の評価・意見

学生と同様、カリキュラム評価委員会作成のアンケートと実習後のカンファレンスから以下の評価を得た。肯定的な意見としては、「実習時間帯は臨床の現場の動きに適當、臨床の現場でしか学べないことを学んでいた。学生や教員とのコミュニケーションに戸惑いはほとんど

なかった。教えたいことと一緒に行いたいことが増えて指導は大変だったが一生懸命取り組めた。看護婦にとっても刺激になった。主体的に取り組んでいて教えてあげたいと思った。学生は、楽しそうであり苦しうでもあったが生き活きとしていた。学生はお客様ではなく、学生の病棟になっていた。学生間のチーム内での互いの突っ込みあいも楽しかった。学生数は適当で、多くても少なくともチームはつくれない。看護は1対1ではなくチームですということが見えたのではないか。チームの発生と進化がみえた」などであった。

検討事項としては、「同じ疾患の患者ばかりではなかったので、8床は欲張りすぎたかもしれない。実習目的およびその日の目標を明示してほしい。疾患や病状の把握が追いつかず、患者の状態についての説明がいつまでも必要だった。指導は楽しいが大変なので年1回の実習が限度だと思う。学生と患者の信頼関係が築けていたかについては不安で、患者が急性期を脱すれば安心だったが、ケアの責任があるのでやや心配だった」などであった。

VI. 2年目の経緯

1. 2年目の実習の計画・準備

1999年度においても、先に述べたような結果が得られたため、病棟の選択、交渉、決定についての変更はなかった。病棟の協力なしには行えない実習という特徴も変わらないことから、再度病棟婦長に依頼し、同意を得た。婦長から同意を得た後、学生が直接病棟に出向いてスタッフと相談しながら自らの実習計画を進めた。しかし、初年度と2年目の準備状態には変化があった。この変化は、学生とスタッフと教員の認識のズレである。すなわち、学生にとっては初めての实習であるが、病棟スタッフや教員にとっては、2度目の実習であったことである。また、この実習を体験した2名の学生がこの病棟で勤務していたこともあり、これらのことから教員は、病棟側の理解は得られていると判断し、病棟スタッフとの交渉は婦長に委ねて、病棟婦長から同意を得るのみにとどめていた。

初年度はすべてが初めての試みであり、学生と病棟スタッフが相談しあい教員はこれをサポートする形で一から創りあげる流れが自然にできた。また、学生は、主体的に企画することそのことが自尊感情を高め、共同で策定するプロセスにおいて、話し合いの回数を重ねるたびに学生は生き活きと変化し、多くのことを決定し創りあげていった。しかし、2年目は、学生とスタッフとの関係は、会を重ねるたびに両者の緊張が高まり、共に創りあげるというよりも学生と教員との間の準備時間や回数が多くなり、その検討内容が病棟で実施可能かどうかを

確認するという形に変化した。これは初回の話し合いの場で、学生の実習計画の甘さを病棟スタッフから鋭く指摘され、学生は、予測以外の事実で驚異と威圧感を感じた結果生じた。学生からは、「与えられた実習に慣れていて、何を計画すべきかがわからなかった。自分たち学生に対する病棟の評価は1回目の病棟とのミーティングによって決まってしまったような気がするし、去年の学生と比較されているような気がする。そのため、教員にはもっと早い時期に示唆を与えてほしかった」という感想・意見であった。学生の過密なカリキュラムの中での実習準備期間における学生を組織化する困難さの中で、各グループのダイナミクスの特徴などに応じた教員の支援のあり方が問われた。

また病棟では、スタッフからも「2年目なのだからすべて一からではなく、学生にはある程度の示唆が必要なのではないか」との意見も出て、病棟側には、積み重ねの意識が高く、過去以上に実習に対する期待が高くなっていた。また、学生の小病棟を担当する病棟チームメンバーが初年度とは変更され、実習に直接関わるスタッフレベルまでの実習目的の浸透不足や誤解なども重なった。

学生と病棟スタッフと教員間の連携と信頼は欠かすことができず、相互作用で、良くも悪くも変化する。組織そのものを動かす、主体性を重んじる実習を行うためには、学生や病棟スタッフのグループダイナミクスを把握し、状況に応じたサポートを早期に行う必要があった。特に病棟側の受け入れ態勢は重要であり、看護提供システムの単なる体験ではなく、実習目的を重視した教育的環境を整えるという教員の基本的役割を学んだ。

2. 2年目の実習内容

実習内容に関しては、学生と病棟スタッフとの協働で最終的には決定し、初年度との大きな変更はなかった。1病棟35床中8床を学生が担当する小病棟として特定の患者群を学生が受け持ち、その8床に関しては、24時間継続して学生チームで責任をもって看護を行った。初年度同様、受け持つ8床の患者の疾患は限定しなかった。実習スケジュールは、病棟スタッフの指導を受けながら学生が作成した。実習期間は2週間で土日も継続して1人1～2回の16時間の2交代夜勤も行った。学生グループのインチャージをマネージャと命名し差別化して配置し、申し送りも責任をもって実行した。

患者への倫理的配慮、指導体制および指導方法、記録や課題、評価方法については、初年度とほぼ同様であった。

3. 2年目の評価

カリキュラム評価のためのアンケート結果および実習

後の病棟スタッフとのカンファレンスで、次の結果が得られた。

1) 学生の評価

実習に対する満足度は全体的に高かった。「大変だったが得るものが多かった」「自ら求める必要性」「意思決定と、アサーティブの難しさを実感」「マネジメントを認識」「チームでのケア提供の体験と、メンバーシップ・陰の支えの難しさと重要性の実感」「未熟さ、責任の分散」などを指摘していた。

実習のサポート体制に関しては、病棟スタッフの指導の一貫性と、病棟側の学生の受け入れやすさや話し合いのスムーズな進行を達成するための教員からの情報提供、実習の準備期間の必要性が指摘された。

2) 看護婦の評価

肯定的な意見は、主体的に実習し頑張っていた、実習前は不安だったが実習が進むにつれて成長しほっとした、看護婦側のチームワークも感じとれて自分たち自身の連携に対する反省もできた、などの意見があった。

検討事項としては、忙しい中で行うには負担が大きく、患者へのケアの水準を保証する観点からは大変な実習である、看護婦・士の動きやシステムを参加観察によって理解した上で実践する、学生と病棟スタッフと教員/TAとの三者で実習内容を早期に創りあげて、実習開始時には試行錯誤せずに実践できたほうが効率的、また、どこまで実践させるかを決定する必要がある、などの意見が出た。また、新卒看護婦・士でも大変な体験であるのに、学生に体験させる必要があるのか、など、実習目的とスタッフの教育に関する価値観との不一致など、多くの率直な意見が出され、この実習には、スタッフ全員がコミットしていない事実が明らかになった。このことは、2年目で実習に関する本音の話し合いができたということになる。

VII. 3年目の経緯

1. 3年目の実習の計画・準備

2000年度においては、これら1999年度の教訓をふまえ、病棟の選択、交渉、決定についての大きな変更はしなかったが、病棟スタッフの協力なしには行えない実習であることを再度念頭において準備した。3年目は、婦長の担当病棟の移動があり、副婦長が婦長に昇格した。実習についての概要を知っているメンバーでの再スタートではあったが、過去2年間の実習の詳細な経過および実習の目的・意義を早期から説明した。また、これら病棟管理者に加えて病棟スタッフにも変化がおきていた。看護婦の中でこの実習に積極的に関わると意志表明した5名の有志によって「看護教育を考える検討会」という名称の

プロジェクトがスタートした。準備段階から、このプロジェクトメンバーと教員との話し合いの機会や時間を調整し、このメンバーと積極的に十分な討議ができた。これら病棟管理者と実習担当者との協力体制が得られた状態で教員が病棟会に出席し、病棟スタッフへ実習に関する説明を行い、実習受け入れの検討を再度依頼した。この会を通して実習受け入れの是非が検討され、その後受け入れの意思決定がなされ、病棟婦長から実習受け入れ同意の報告を得た。

このように実習受け入れに関して民主的意思決定がなされ、「看護教育を考える検討会」というプロジェクトメンバーが、学生および教員と病棟とのコミュニケーション経路を確保した。また、よりよい実習にするためのアイデアや労力の提供に尽力するという保証も得た。このようなプロセスを経て、学生と病棟との打ち合わせが行われた。

一方で学生に対しては、他の科目に支障が出ないように配慮しながら、できるだけ早期にガイダンスを行った。2年目は、創造性を大切にすることを重視するがゆえに、過去の方法に振り回されないよう情報提供の量の決定に戸惑った。しかし3年目は、最低限の情報は教員側から積極的に提供し、過去積み上げてきた情報も学生の意向を聞きながらできるだけ真実を伝え、学生自身が多くの選択肢から選択し決定できるよう配慮して、その中で新たな発見や創造ができればよいと考えた。学生にも実習目的や目標の理解の徹底を行っていたため、それを達成するための実習方法の検討を行い、希望する内容の骨子を第1回目のミーティングに持っていくことができた。ただ3年目は、実習を選択する学生数が少なく3名で、チームや組織としての成長がどのようにできるかが不安であった。しかし、コミュニケーションがとりやすく情報伝達が徹底でき、互いを知り合うにはよりよい人数でもあった。

2. 3年目の実習内容

実習内容に関して学生と病棟スタッフとの協働で決定していく方法に変更はなかった。ただ、具体的方法には、学生の希望、学生数が少ないこと、病棟側の提案などによっていくつか変更した。

過去2年間では1病棟35床中8床を学生が担当する小病棟として学生が受け持ったが、3年目は3床に減らした。また、その3床に入院する患者を、婦人科疾患の患者に限定する配慮をした。その3床に関しては、24時間継続して学生チームで責任をもって看護を行うことは継続した。ただ、24時間の継続した看護提供を実施するには学生数3名では無理であったこともあり、病棟スタッフメンバーと共にチームを結成する形をとった。つまり

学生がいらない勤務帯においても、学生の看護方針の継続や修正を同じチームの看護婦が意識して実施する方法をとった。また、日勤帯の学生を担当する1看護スタッフの患者受け持ちは5～7人であるため、学生が受け持つ患者3人以外の2～4人の患者ケアも、適宜可能なら学生と共にいった。

今年度は、1、2年目には可能だったスタッフナース以外の役割であるインチャージや選番業務の体験をすることは不可能であったが、申し送りは責任をもって実行した。実習スケジュール・勤務表も、病棟スタッフの指導を受けながら学生が作成した。実習期間は2週間で土日にも継続して1人2回の16時間の2交代夜勤も行った。

学生の希望によって3年目に変更した実習内容は、日勤と夜勤の各1回目は、まず看護婦について参加観察方法をとったことである。これによって2週間の実習期間において、自律して看護する時間が少なくなるのではないかと危惧されたが、学生が1看護婦と共にケアをすることで3人の患者のケアだけではなく病棟全体を知り、業務内容やその流れを体験し、病棟スタッフやシステムになじみ、メンバーの一員となることを助けた。

指導体制は、病棟スタッフからの提案もあってTAは配置せず、日勤帯のみのケアを教員がサポートした。夜間については、大学作成の「学生の臨地実習等の安全対策に関する申し合わせ」事項および教員との連絡方法伝達の徹底に努めた。また必要時には病棟の連絡ノートにも必要事項を記載し、連絡や伝達に努めた。

患者への倫理的配慮は例年同様行った。

スタッフのサポート体制は甚大であった。参加観察初日の日勤帯では、実習指導担当者の5人のうち3人が日勤帯に勤務するよう配慮され、学生とスタッフが1:1のペアとなって看護を行い、実習目的や方法を配慮した指導がなされた。つまり、実習後半には学生ができるだけ自律して看護実践ができるように、実践レベルでのオリエンテーションを含んだものだった。また病棟では、35床を2チームに分けたチームナース体制をとって、「看護教育を考える検討会」のメンバーが必ずしも同じチームに所属していたわけではなかったが、実習期間のみは学生が担当する小病棟側の患者を受け持つように配慮されたアサインメントがなされ、徹底・一貫した指導体制がとられた。これらの配慮は事前に教員に示されてはいなかったが、実習期間中のスタッフのアサインメントから気づき、教員や学生は感動し感謝した。

記録については、初年度と同様であった。課題については、学生が何を感じ学んだかを知りたいという病棟側の希望があり、学生も納得したため、テーマや分量は自由形式にしたまとめのレポート提出を行った。

3. 3年目の評価

カリキュラム評価のためのアンケート結果および実習後の病棟スタッフとのカンファレンス、学生のレポートから次の評価を得た。

1) 学生の評価

実習の具体的方法についての感想をまずまとめる。受け持つ病床数については、「受け持つ患者の疾患を婦人科にしぼったことで事前学習やケアの提供に取り組みやすかった。急性期の患者が重ならなかったこともあって今回は3床で適当であった。部屋を固定することで入院などの患者移動によって空床ができて3床以下の受け持ちになることもあったが、実際の病棟のような忙しさの変化およびその変化による仕事の運び方や他者との連携も学べた」という意見から、学生3名の場合の3床は適当であったと考える。今回初めての試みの参加観察については、「病棟全体の患者を知ることができ、恐れることなくナースコールにも対応できた。看護婦・士の看護や技術を身近に見聞きして一緒にケアもできて学べた。実際に体験できるケアや処置も多かった」などで効果的だったと考える。

チームでのケア提供については、「チームの中における自分の役割を協働して実践できた。チームメンバーの特性を生かしながらの活動の大切さがわかり実践できた。チーム全体によって看護が提供され、共に看護することを実感できた、看護にまつわり発生する様々な業務や他職種との連携や調整、チームの管理が必要不可欠であることがわかった。メンバーとしての責務を実感した。記録を病棟と同一のものにすることでチームとして計画を立てることができてよかった。チームで関わることのおもしろさがわかった。いろいろな視点や関わりでケアを提供していることが実感できた。チームの支援を受けるという受動的立場ではなく自ら考え判断してチームの支援を活用するという考え方を肌で感じることもできた」などの意見を得た。

病棟の受け入れ態勢に関しては、「実習前の病棟との事前の話し合いをもった実習は初めてだった。実習担当者を決めてもらえて相談しやすかったし担当者以外の方も接しやすかった。看護婦の輪の中に入ることができた。病棟のメンバーになれた気がする。病棟の受け入れが非常に暖かく伸び伸び看護を実践できた、看護婦の根拠を問う教育や指導から深い学びを得られた。勤務時間帯の学生は1人だったが看護スタッフや教員のサポートがあったので困難はなかった。夜勤帯は看護婦からの適切な指導で十分な支援を得られた。連絡・調整・報告が書面を通して共有でき、疑問も解決されて安心して実習に臨めた」などで感謝を込めた意見が多かった。

その他の意見として、「病棟で働くことということがわ

かった。レポート（申し送り）の大切さを実感した。こんなに楽しかった実習はなかった。看護婦の仕事に奥行きを感じた。ナースになる日が待ち遠しい。この実習での感謝は立派なナースになることで返したい」などだった。

2) 看護婦の評価

実習全体については、「全員一生懸命実習していた。自律的自主的積極的に実習し動くことができていた。ここまで達成できるとは思っていなかったし、期待していた成果もよく見えたのでよかった。事前準備が万端だったし適宜追加学習されていた。大きな問題も生じずにあっという間に終わった感じがした。学生の実習の取り組み方は自分たちの励みにもなった。ナースコールも積極的にとってもらえて助かった」という肯定的感想を得られた。

実習の具体的方法については、「学生人数が少なかったことや診療科を特定したことにより実習を受け入れる側も余裕をもってできた。参加観察が終わる頃には学生も病棟にとけ込んでいた」であった。

指導やサポート体制については、「今回は互いの意志疎通を充分に行った上での実習ができて大変良かった。事前の話し合いで実習について理解し納得して実習に臨めた。夜間に教員やTAがいないことで直接学生に指導やコミュニケーションができてよかった。学生も他に頼る人がいないことで看護婦・士と直接接することができたのではないかと。この実習は学生と看護婦の相互作用が大きい」などだった。また、「効果的な実習である。しかし、新しいことを始め、成果を出すには時間がかかるし本当に大変である。また、各々それぞれの意見がある中でひとつの目的を浸透させていくためのパワーも必要である感じた」との管理的視点からの意見も得ることができた。

VII. 今後の課題

以上のような結果から、実習目標や方法に対する病棟スタッフのコミットメントと、この実習の学生指導を引き受ける意思決定がいかに重要であるか、3年間という時間経過と直接的な話し合いの中で学んだ。2年目の病棟スタッフの率直な意見と教員側の傾聴、そしてこのプロセスにおける提言の中で、改善可能なことは積極的に取り入れ、両者が歩み寄り、基本を確認しあいながら実

習を企画したことがこの実習をさらに効果的に進めるうえで教育的環境を整えたと考える。この2年目の率直な意見交換がなければ、特に3年目のような効果的な理想的ともいえる病棟側の実習受け入れ体制は成立しなかった。これらの成果から、今後もこの実習目的や目標を継続し、指導体制に関しては、学生数や病棟の実状に応じた話し合いによる決定によって実習を成功に導けると考える。今後どのような受け入れ体制が可能かは、再度の病棟への依頼および検討が必要であるが、学生と病棟と教員の三者で創り上げる実習は継続する価値がある。学生数は指導体制にもよるが、1チーム7～8人が限界であると考えられる。また、学生は1スタッフとしての看護実践を達成するために、実習の事前準備に時間をかなり費やしていたため、自律して実習を準備する期間を確保するためのゆとりとそのための調整も必要である。

VIII. おわりに

病棟スタッフは、この実習において学生をチームの一員として受け入れるためには、4月に入職したばかりの新卒看護婦・士を育てるための内容の一部を、実習前から実習2週間終了までに達成させる感覚に陥ることもあるという。また、学生の希望を大切にしながら、実習という限られた条件の中では、看護婦・士の資格をもった新卒者を受け入れる以上の創意工夫が必要になる。その中で、「あなたたちの病棟」と学生たちが受け持った小病棟を表現し、それをサポートするための工夫や労力を常に提供する病棟の看護婦スタッフの姿勢に感動し、感謝している。病棟スタッフと教員、学生が一体となった時、この取り組みの姿勢が学生の学習効果を高め、また学生の病棟スタッフおよび看護への大きなプラス評価につながり、看護への意欲と自信、つまり自己効力感をも高めたと考える。

引用文献

- 1) 聖路加看護大学1993, 1994, 1995年度カリキュラム委員会：聖路加看護大学1995年度改定カリキュラムについて、聖路加看護大学紀要, 22, 113-121, 1996.
- 2) 井部俊子：看護教育における卒後臨床研修のあり方に関する研究、平成11年度 厚生科学研究（医療技術評価総合研究）報告会資料, 1, 2000.

Abstract

A Three-year Study of Nursing Practice in a Nursing Delivery System

Keiko Toyomasu, R.N., M.N.¹⁾, Ikuko Iwai, R.N.¹⁾

Over the past three years we have encouraged and supported student nurses in the processes of decision-making, planning, organizing and managing their nursing practice. During those three years, student nurses, faculty and support staff reported different experiences. However, the student nurses seemed to be impressed and learned much from the experience. We have heard such comments as “This practice is valuable”, “I feel the responsibility of being a member of the team”, “This is our unit. (I belong to this unit.)”, “I felt we were delivering nursing care as a team”, and “I’m looking forward to being a nurse”. The results of this study positively influenced us to continue this education process as the guide in developing the purpose and detail of nursing practice for student nurses. To implement this process and to allow student nurses into the facility, we needed to gain the understanding and consent from the staff on the patient care units. Establishing positive relationships with the unit and its staff nurses provided student nurses with support in their study, motivation and increased self-efficacy in their developing role as professional nurses and allowed them to present a good impression to the unit.

Key Words

nursing delivery system, nursing practice, team, organization, autonomy

1) St. Luke's College of Nursing, Nursing Administration